死をどのように考えてきたのか④

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

輪廻という思想はインド社会が培ってきた宗教伝統ですが、仏教はそれを引き継ぎつつも、存在のあり方を無常と捉え、自分の存在を相対化（無我あるいは非我）することによって、独自の解脱を教えました。

ブッダは、真実をありのままに知見すること、すなわち「およそ生起する性質のあるすべてのものは、滅びゆく性質がある」という苦の本質を知ることを教えました。そうして「見る眼が生じ、理解が生じ、洞察が生じ、覚知が生じ、直観が生じ」、無常であるものに拘泥し、執着し、それゆえ思いのままにならない現象に迷う生存から解放されることが語られたのです。それはブッダが宣言したように、二度と迷いの世界に再生しないこと、輪廻の輪から解放されること、解脱を得るということでした。

仏教は日本を含むアジアの地域を中心に広く伝播していきました。時代を経るにしたがって、教理が積み重ねられ、タイなどに伝わった仏教と中国や朝鮮半島、日本へと伝わった仏教とに大きく分けられることがあります（南伝仏教と北伝仏教、上座仏教と大乗仏教）。また伝えられた地域でそれぞれの発展を遂げていきました。その中、チベットの輪廻の思想は他の地域とは異なった発展を遂げてきたようです。よく知られた「活仏」の存在です。チベットにおいて、高度に修行を積んだ人は転生にさいして、自分で生まれでる場所や時を選べるというもので、いわば、そのような転生を繰り返せる人が活仏で、かの人は自らの輪廻の一環としてだけでなく、人々を救う（衆生救済）ために輪廻を繰り返していると考えられています。

ダライ・ラマはそのような活仏の一人として非常に高位な人として知られています。現在のダライ・ラマは14世で、チベット仏教徒のみならず、多くの人々の尊敬を得、1989年にはノーベル平和賞を受賞しました。

ダライ・ラマ14世が語る死

ダライ・ラマ14世によれば、死は人間にとって究極の恐怖であり、一般的認識では「生命の終焉」あるいは「存在の停止」とされている。仏教のような宗教的伝統を持つ宗教は、古代からのインドの宗教、哲学と同様に再生、転生の考え方を受け容れて、死を「この生命」「現世」の終わりにすぎないと考えている、と語ります。そして、

> この場合、「死」は衣服を着替えるほどの意味しか持たない。私自身がまとっている法衣が、破れほころび、もうどうにも用を足さなくなったとき、私はこの法衣を脱ぎ捨て、新しいもので身を包むことになる。古い法衣は捨て去られるが、私の生命は生きつづける。それと同じように、生命は肉体が滅びた後も生きつづける。その折々の肉体から離れてもなお。（ダライ・ラマ『ダライ・ラマ「死の謎」を説く』角川文庫、平成20年、21～22頁。【参考】「彼（個人の中心主体：引用者）は決して生まれず、死ぬこともない。彼は生じたこともなく、また存在しなくなることもない。不生、常住、永遠であり、太古より存する。身体が殺されても、彼は殺されることがない。」「人が古い衣服を捨て、新しい衣服を着るように、主体は古い身体を捨て、他の新しい身体に行く。」上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』2：20、22）

そして具体的なひとつの肉体に宿る生命は、具体的な特定の条件のもとにおいて、誕生し、生命を育み、やがて死ぬという特定の生命に過ぎず、生命そのものには始終がなく、時々刻々と変化するような霊魂もない。したがって具体的な肉体にとって死は変化の到来を告げるだけのものであると説きます（ダライ・ラマ、同書23～26頁）。だから、このように死を受容する者は自分の死に臨み、恐怖を取り払うことができ、心が豊かになり穏やかになって喜びに満たされるものだと語るのです（同書、26頁）。

死の恐怖を超える

ダライ・ラマ14世は、人が未来を見通すことができない不安と死を見通すことのできない不安は同様なもので、そのような不安が死を恐怖と思わせるものだと諭します（同書、31頁）。そして、もし、輪廻や転生を信じるのではなく、人生はただ一度のものだと考える人に対して、死の恐怖から逃れることは易しいことではないので、死について考えるな、思うなと忠告します（同書、34頁）。さらに、

> この生ける肉体が存在するかぎり、人間として生を享けた以上、死は不可避的に訪れるであろう。しからば、それもまた人生の一部として享受する他ない。また、死が人生の不可分な一部である以上、そして、それから逃れられない以上、無闇に死を怖れるよりは親しく付き合ったほうがいいに決まっている。人生の早い時期から死を親しむことができれば、いざ死ぬというときに至っても、恐怖ははるかに小さなものとなるはずだ。…
>
> 人間は年老い、やがて死を迎える。そのときなれば、従容として老いたように、従容として死ねばいい。来世があるか否か、思い迷う必要はない。あるがままの死を迎え、認め、受容すればいい。それが死というものだ。（同書、37頁）

と、従容として死ぬことを勧めるのですが、従容とした老いも従容とした死もそう簡単なものではありません。だからこそ、宗教は死を教え、この世の生を意味あるものとしてきたのでしょう。

ダライ・ラマ14世は輪廻転生を理解するのはそう簡単ではないけれども、誰にとっても十分に受け容れられるものであって、思想そのものは、チベット仏教や古くからのインド思想を信じる人々にとっては特段目新しいことではないとした上で、チベットではその受け取り方に関して、他とは違う仕組みあるいは伝統を構築してきたと言っています。

彼は、輪廻とは非常に独特な仏教思想であって、「前世によって決定される次の生、次々と引き継がれてゆく生けるものの生命のことである」（同書、54頁）と定義し、すべての生きるものに起こっている継続して回りつづける生命の輪（同書、57頁）であると言葉をつないでいきます。

＊訂正のお願い：前回の最初の引用文1行目「マヤ」→「ヤマ」。